

1945年8月の広島原爆投下から半世紀たった1995年に、ワシントンのスミソニアン航空宇宙博物館で原爆投下の戦闘機「エノラ・ゲイ」の特別展が計画され、その「展示の仕方=歴史の解釈」ともなるため、賛否両論の大論戦となりました。スミソニアンは「人類の知識の増大と普及に寄与する」ことを目的とする、連邦議会の西に広がる遠大な芝生のモールに立ち並ぶ19あまりの美術館・博物館「群」です。中でも一番人気の航空宇宙博物館は、月の石や月面着陸機、世界で3機しか見つかっていない潜水艦からの離陸可能な日本の超小型戦闘機などなど満載で、いつも世界中からの来館者でにぎわっていました。当初スミソニアンの意図は、エノラ・ゲイと共に原爆被害と歴史的背景も展示し「投下の意味をあらためて見直す」ことでした。ちょうどその頃日本の航空関連グループの通訳として機体修復作業の見学に同行し、「スミソニアンでは展示物として仕上げる前にまず保護コーティングを施しその上から塗装する」という念の入った職人芸などの説明を受けながら、目的のエノラ・ゲイの不気味なまでにキラキラと磨きあげられた大きな部分部分に圧倒されました。この羽の下で犠牲になられた多くの尊い命を想い涙があふれ、同行グループの中にも同様の方々がいらっしゃいました。その後大論争の果てに、当初の展示の意図は失われました。実際の展示を一人で見に行った時には、修復を終えさらに巨大な機体全体が周囲を威圧しながら吊り下げられた姿で、横に渡された観覧橋を進むと表示板があり、「当時の最新型戦闘機であったこと等技術的な最小限の説明」でした。これでは何も伝わらないとがっかりし、歩き出して少し離れた時に、後ろで若い白人の父親が5歳くらいの男の子に機体を指さしながら「この戦闘機のおかげ

で戦争に勝ったんだ。かっこいいだろ？」と説明しており、男の子は「すごいね〜！！」と深くうなずいていました。怒りで顔が熱くなり、思わず声を上げようとしたのですが、先の見学の際この展示を巡る論戦がいかに激しいかを聞いていたので、ここでこの親子に話しかければ、周りも巻き込んで「極小版第三次大戦」になりかねないと自制し逃げるように帰りました。しばらくたってようやく落ち着いた頭に浮かんだ言葉は「教育」で、あの男の子は父からあのように教えられ、おそらくよほどのインパクトある他の考え方に出会うか、広島原爆記念館などを知らなければ、そのまま大きくなるのだろう、それが彼ら親子にとっての「正義」で、そしてそれがまさに「教育の効果」なのだと実感しました。

さくらでは特に何かの主義や思想をとってはいません。幼い子ども達にできるだけ中立・公平にこれから生きてゆく社会について伝えたく日々の保育を展開しています。始まりとしては「子ぶたを襲う悪者のおおかみ」や「悪事の果てに桃太郎に退治された鬼」であっても先々では、もしかすると「おおかみのおなかをすかせた子ども達」や「母子家庭になった鬼の妻子」まで想像できるようになり、そして最後にもどのような立場をとって何をするかは、それぞれが考えを尽くして決めなければならないことを自然に分かるようにしたいです。自分の力で可能な限りの情報を集め、知力・体力を尽くして判断・行動する。この繰り返しを何事においてもできるように願っています。毎日の保育室では優しい先生たちから「あのね同じことをされたらどう思う？」と問いかけられ一生懸命考える姿がとても愛おしく可愛いです。明日がどうなるかも分からない世界状況の中で、ぜひ皆さまとご一緒に次の健康な世代を育ませて頂きたいです。どうぞよろしく願いいたします。園長 山内香幸